

日本の学生をできるだけ多く国外に出そう

—九州大学のカリフォルニア英語研修の紹介—

九州大学カリフォルニアオフィス所長／JUNBA会長 松尾 正人

Masato Matsuo

1. はじめに

文部科学省が平成21年度から開始した「国際化拠点整備事業（グローバル30）」（大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業）については九州大学においても鋭意熱心に活動中である。受入れ留学生の実績を見ると、2008年の1,292名から2011年5月の実績は1,866名となっており、3年間で44%の増加である。これは主として海外の学生を日本に呼び込み、日本の大学の教育や研究の国際化を図ろうという試みである。

一方、日本人学生を出来るだけ多く国外に出そうという試みも多くある。九州大学をはじめ、カリフォルニアに拠点オフィスを置く日本の大学で組織するJUNBA（Japanese University Network in the Bay Area、www.junba.org）のメンバー大学では各種研修を通して積極的にそれを行っている。その結果は英語力向上や国際化にとどまらず、学生が自立的、積極的な生き方に目覚めるという予想を超えた優れた効果が得られているようである。ここではJUNBAの活動を簡潔に紹介し、九州大学のカリフォルニアにおける英語研修について詳しく報告したい。

2. JUNBAの活動

カリフォルニアのサンフランシスコ・ベイエリアには10校ほどの日本の大学の拠点がある。その拠点間の連絡ネットワークとして2006年にJUNBAが作られた。JUNBAメンバー各大学はそれぞれ独自の活動をしているが、その中で日本から学生をできるだけ多く連れてこようとする試みは重要な活動となっている。メンバー大学の活動内容を紹介すると以下のようなになる。

鹿児島大学北米教育研究センターでは毎年20～30名の学生をシリコンバレーに連れてくる海外研修プログラムを実施しており、それに海外インターンシッププログラムを加え、2011年度は他大学の学生も含めて50名を超す学生を参加させている。福岡工業大学カリフォルニア事務所では、毎年職員10名前後を海外研修として受入れるというユニークな活動を行っているが、その他に毎年20名前後の学生を受入れ、カリフォルニア州立大学イーストベイ校において英語研修を行っている。2011年度からは、さらに10名前後の学生を選抜し、ほぼ同数の米国人選抜学生と学ぶ2週間の共同特別リーダーシップ研修を始めている。桜美林大学では桜美林学園アメリカ財団をベイエリアに置き、北米の提携校と短期・長期プログラムの内容を充実させ、短・長期合わせて250名を超える学生の留学を実施している。大阪大学サ

ンフランシスコセンターでは、各部局の夏季研修で、工学系院生（約40名）、理学部生（約20名）、歯学系院生（約10名）等を受入れると共に、サンフランシスコ研修や日米学生交流会等を企画実施している。この他、グローバル人材育成を目指す新咸臨丸プロジェクトで、全学からの院生（15名）を1週間のワークショップに参加させている。

このようにJUNBAでは日本から学生を出来るだけ多く連れてくることに力を入れている。互いに情報交換を行いつつ、各メンバー大学オフィスそれぞれが独自のやり方でプログラムを実施しているのが現状である。

3. 九州大学のカリフォルニア英語研修

九州大学ではカリフォルニアオフィスを通して、カリフォルニア英語研修、QREPと呼ばれるシリコンバレー研修、カリフォルニアからのビジネス関連遠隔授業などいくつかの学生に向けたグローバル化の試みを行っているが、ここではその英語研修プログラムとその意義について報告する。

3-1. 英語研修の意義

日本にいと学生達は英語を話すチャンスが少なく、英語の必要性さえ考えることなく過ごしているのが実情であろう。しかし、外から日本を見ていると、世界は日々変化しており、グローバル化は様々な面で一層進んでいることがひしひしと感じられる。アメリカに來ている中国、韓国、台湾などのアジアを含む世界の若者はどんどんグローバル化に対応している感があるが、日本の若者はそれに取り残されているのではないかという危機感を感じている。グローバル化は引き返すことができないところまで來ているのではないだろうか。グローバル化に対応するには英語が出来ればよいというわけではない。英語が出来なければその入り口にさえ立つことが出来ないのである。まずは英語力、しかも日本を出て英語を学ぶことでグローバル化とは何であるかを、身をもって体験出来るのではないかと考えている。こういう背景のもとに九州大学ではカリフォルニアにおける英語研修に力を入れているわけである。

3-2. 九州大学カリフォルニア英語研修の特徴

英語研修といっても、このプログラムは英語を学ぶだけではない。力を入れている2つの特徴がある。一つは、国外に出たユニークな機会を利用して日本を、そして自分を外から見るという立場を認識してもらう。そのための色々なプログラムを用意していることである。

国外に出て多くの人々と交流し、話を聞き、色々なことに遭遇すると、初めて日本の世界における位置づけや、日本の素晴らしさ、そして現在の日本の問題点が見えてくる。同時に日本にいたのでは気が付かない自分自身のことが見えてくるようになる。この研修を機会に日本のこと、自分自身のこと、そして自分の周りのことを自分で観察し考え、それを外に向かって発信することの重要性を認識してもらいたいと思って

いる。そのために、毎週フィールドトリップを行いシリコンバレーの大学や企業を訪問して研究者やエンジニアやビジネスマンと交流し、同時にシリコンバレーのリーダー達や大学教授を講師に招待して講演をお願いしている。

もう一つの特徴は参加者全員がアメリカ人の家庭でホームステイを行い、異文化の中で4週間を過ごすという経験をすることである。英語を話さなければ、何も起こらないことに気が付くし、毎日気に入らない食事も我慢しなければならない状況におかれる。こういう実生活を現地で体験することで、英語は学ぶものではなくて慣れるものであり、意思疎通のツールにすぎないことがわかる。それよりも自分が何を言いたいかをはっきり持つことが如何に大事であるかに気が付くのである。

ちなみに、このプログラム全体にわたっての安全面では、カリフォルニアオフィスのスタッフが毎日のように学生に接し、問題がないか手厚くチェックしており、何か問題が起こると直ちに対応するようにしている。

3-3. このプログラムの内容

今年の夏は下記の3種類のプログラムを実施した。すべての英語研修は San Jose State University の Studies in American Language (SAL) において、九州大学用に特別にデザインしたカリキュラムで授業を行ってもらっている。

Y R E P (Young Researchers English Program) 若手研究者英語研修は、特に大学院博課程学生向けのものであるが、修士課程学生も博士課程に進む条件で受入れている。2011年は化学系の15人が参加した。

S V E P (Silicon Valley English Program) シリコンバレー英語研修は、学部学生向けのものであるが修士学生も多少入っている。2011年は各学部から40人が参加した。

A L E P (Agri-bio Leaders English Program) アグリバイオリーダー英語研修は、農学部学生が主体で学部生、修士学生を問わない。2011年は16人が参加した。

以下に各グループの研修内容について説明しよう。

4. Y R E P について

まず、今年の Y R E P には将来世界で活躍する研究者になることを目指す15名の化学系大学院生(博士課程10人、修士課程5人)が参加した。今回で4回目の開催となるこのプログラムは、国際学会等で自信を持って発表や質疑応答を行えるように、主としてプレゼンテーション能力の向上を第一の目標にしている。英語の授業もそれに応じて九大生用に特別に設計されたもので、Effective Presentation, Grammar for Fluency, Accent Training, Speaking with Confidenceなどに毎週18時間が当てられた。

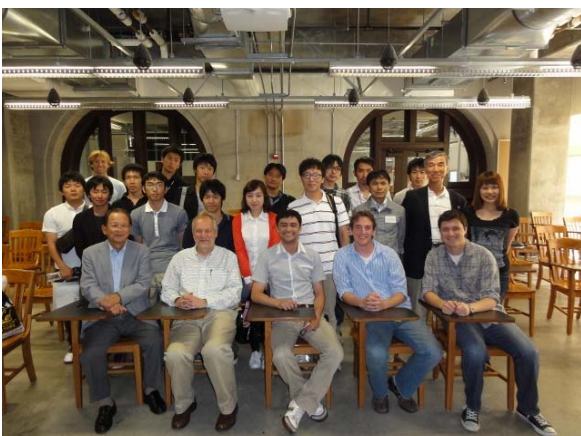
それに加えて、毎週金曜日にはフィールドトリップを行い、参加者の専門分野に近い企業の研究所や大学を訪問し、国際的な研究発表の実践的な練習を行った。別名「海外武者修行」と呼ばれているゆえんである。2011年は化学系が中心だったので、UC Berkeley, IBM Almaden Research Center, Stanford University, San Jose State University などの化学・生物系の研究室を訪問し、訪問先の教授や研究者と交流し、参加者が各自の研究内容について英語でのプレゼンテーションを行った。それぞれに活発な質疑応答や意見交換が行われた。カリフォルニアオフィスではこれらプレゼンテーションに先立ち各人の個別発表練習会を催し、自信を持って発表が出来るよう指導している。この個別練習に使った時間は発表者12人に対して合計で30時間に達した。一方で、Plug and Play というインキュベーションセンターを見学し、ちょうど行われていたエレベーターピッチ的(*)な発表会を聞いて、科学や技術がビジネスに繋がる現場を身近に体験した。



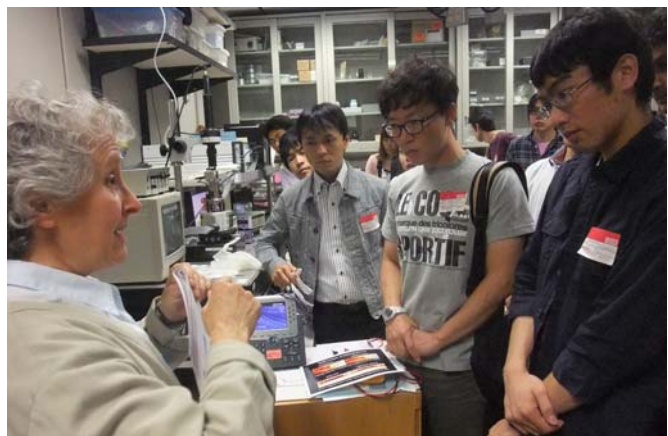
UCバークレーDoudna 研究室にて
発表するYREP学生達

それに加えて、シリコンバレーのビジネスマンや研究者、および教授陣から講話や講義を聞くチャンスも作り、イノベーションのメッカであるシリコンバレーの人々の考え方を学んだ。

(*) エレベーターピッチとはエレベーターに乗って降りるまでの1-2分の短い間に自分の言いたいことを伝える手法であり、シリコンバレーでは良く使われる。



UCバークレーGlaeser 研究室の
皆さんと共にYREP学生達



IBMにて研究者から原子間力顕微鏡の
説明を受けるYREP学生達

4-1. YREP 学生たちは何を得たか

参加者は毎日実践的な英語の授業による英語力向上に加え、世界のイノベーションを牽引するシリコンバレーを体感した。その結果、世界で活躍する革新的な研究者としてのマインドはどうあるべきかを認識し、自分の研究以外の様々な分野の幅広い知識と理解が如何に必要であるかを肌で感じ、イノベーションを起こしそれを事業につなげることの大事さを身近に体験することが出来たようである。さらに、世界で活躍するには英語力が如何に不可欠であるかがわかり、明確に英語を学ぶ強いインセンティブが得られた。非常に有意義なプログラムであったとの感想が全員に近い参加者より寄せられている。下記に参加者の中から5人のレポートを一部抜粋し紹介する。

- ・ ここに来て初めて起業はリスクではなくチャンスであるということ鮮明に体感し、自分が日本という小さな殻に閉じこもっていたことに愕然とした。また同時に、自分も何か行動を起こしたいと胸が高鳴った。それだけここに来たことは私にとって大きな衝撃だった。
- ・ 世界の最先端は自分の想像を超えたスピードで発展していた。フィールドトリップをするなかで、いかに自分が狭い中で世界を考えていたかが思い知らされた。
- ・ このプログラムに参加して一番変わったと思う点は、自信をもって発言できるようになったことである。これまでは失敗を恐れて、できるだけうまくやろうという感情がどこかにあったと思う。しかし、今はプレゼンのときでも会話のときでも、自分の意見を自信を持って発言できるようになったと思う。本当に充実した時間をこのプログラムで過ごすことができた。
- ・ ホームステイではホストマザーの英語が聞き取れず“Don't be shy. You should speak more.”と何度もいわれ悔しい思いをしたが、慣れてくると少し余裕を持って会話ができるようになった。アメリカでは沈黙が嫌われる。常に自分の意見を持ち、すぐに言えるようにならなければいけないと思った。
- ・ IBM で初めて英語による自分の研究内容のプレゼンテーションをさせてもらい、発表前には、相手に理解してもらうための表現や英語の発音の仕方など様々指導してもらった。まだまだ未熟な発表だったが、自分に足りないもの、またこれからしなければならぬことが何なのかが見えてきた。

YREP については <http://www.chem.kyushu-u.ac.jp/gcoe/jpn/voice/gyrep/> を、また、第3回 YREP の個々の参加者からの最終エッセイには下記を参照されたい。
<http://www.chem.kyushu-u.ac.jp/gcoe/jpn/whatsnew/2011/08/gyrep.php>

5. SVEP/ALEPについて

次いでSVEPとALEPについて述べよう。

まず、2011年で5回目となるSVEPは、各学部から40人の参加があり、学部生36人、大学院生4人の構成である。多いのは工学10人（学部8、院生2）、医学8人で、そのほかは経済（5）、法学（4）、文学（4）、薬学（2）、理学（学部2、院生1）、芸工（1）、21世紀プログラム（1）、教育（1）などの学部および統合新領域学府（1）からの参加があった。一方、ALEPは2011年から始まったプログラムであり、農学部から16人が参加した。農学部ではオープン・プロブレム・プログラムを実施中であり、この研修もその一環として位置づけられている。

英語の授業はこの合計56人の学生を4つのレベルに分け、Presentation, Accent Training, Speaking and Listening, Campus Eventsの4種類の授業が、それぞれ専門の教師によって毎週18時間、4週間行われた。日本では教えられることの少ないプレゼンテーションの授業やアクセントの授業などは特に有益で、英語で話すことへの抵抗感がなくなり、これまでにない自信を身につけることが出来たようだ。



少人数でのプレゼンの授業を受ける
SVEP/ALEP学生達

毎週金曜日のフィールドトリップはSVEPとALEPでは異なる。SVEPのフィールドトリップは主として企業を中心としている。インテル展示館、アップルストア、ヤフー、ソフトウェア会社オラクル、インキュベーションセンターPlug and Play、半導体装置メーカー



ヤフー中国人エンジニアから話を聞くSVEP学生達



Plug & Play Tech Centerを
見学するSVEP学生達

Novellus、そしてスタンフォード大学などを訪問した。一方、ALEPのフィールドトリップは農学に関連するところを選んだ。サラトガ市にある日本庭園「箱根ガーデン」を皮切りに、サンフランシスコの北にあるレッドウッドの森のMuir Woods、スタンフォード大学のJasper Ridge Biological Preservationやバイオの研究室、カリフォルニア大学デービス校農学部、サラダコスモ社のもやし製造の見学、そして最終日にはSVEPと合同でオラクルを訪問するなど多岐にわたった。世界を牽引するビジネス戦略やビジネスモデル、そして実際にシリコンバレーで働くビジネスマンから日本で働くこととの違いなどについて、生の声を聞くことが出来た。日本との違いを考えることは非常に大きなインパクトを与えたようであり、世界に通用する国際人としての第一歩を踏み出すきっかけとなったのではないかと感じている。



サラトガ市にある箱根ガーデンを訪問するALEP学生達



スタンフォードのJasper Ridgeで
Cohen 所長の説明を聞くALEP学生達



オラクル社の美しい建物を背景に
SVEP/ALEP学生達

また、シリコンバレーのビジネスマンや研究者からの講話や、サンノゼ州立大の教授陣より、生物、情報、心理学などの分野の講義を聴く機会を作った。

ホームステイは56人が35軒のファミリーに分かれ、そこから毎日大学へ通うのである。最初はなかなかホストの言うことがわからず会話が出来なかったようだが、家族の行事、料理やイベントなどに参加して毎日一緒に生活すると、だんだん会話が出来るようになり、後半になると英語を話すことに抵抗がなくなった。異文化の生活に慣れ、自ら積極的にコミュニケーションを図る能力を身に付けることが出来たようだ。ホストファミリーと非常に楽しい時間を共有し、家族同様の絆を深めた参加学生の多くは、また必ず戻ってきて共に時間を過ごしたいと話していた。

最終週には56人全員がアメリカに来て感じたことについて自由にテーマを選び、5分程度の英語によるプレゼンテーションを行った。多くの学生が幅広い分野から興味深いテーマを取り上げ、英文原稿を読まずに堂々と自信に満ちたプレゼンテーションを行い、それぞれに研修の成果を十分に感じ取っていたようだ。テーマの例をいくつか示すと、「日米のYESとNOの違い」、「キャリアを変えてもいいのだ」、「専攻科目の選び方の日米の違い」、「自分を売り込むとは何か」、「Taylor Swift コンサートでの日米韓のお客の反応の違い」、などで、アメリカに来て感じたこと、日本との違いについて驚いたこと、気が付いたことなどをテーマにしている。

5-1. SVEP、ALEP学生達は何を得たか

学生達はこの研修で何を得たのかについて、学生のレポートからいくつかの引用を挙げる。なんととってもほとんどの学生が、英語を話すことの壁が取れ、気楽に英語を話すことが出来るようになったと言っているのは大きな成果である。学生48人の満足度平均値は5点満点で4.4という高い評価であった。

- ・ *自分の世界観が大きく変わった。参加前は日本的な思考や見方しか出来なかったもので、最初は日米の違いに戸惑うばかりだった。日本では誰かの意見に黙って付いていけばよかったが、アメリカでは自分の意見が第一に尊重された。自分の意見が言えなければ話も聞いてくれなかったことはショックだった。*
- ・ *自分の英語に自信が持てるようになり、後半ではしっかりと自分の意見を英語で言えるようになったと思う。また、人前でプレゼンをするという経験は、ほとんどゼロに近いもので、なおかつ英語でのプレゼンなど考えられなかったが、自信を持って最終プレゼンをやり遂げることができた。このスキルは、これから社会人になって人前で話すといった意味でも大きなプラスになったと思う。*
- ・ *この研修により自分の視野は間違いなく広がり、考え方も変わった。フィールドトリップでは、自分の分野とは全く関係ない分野であったが、シリコンバレーとはどういうところなのか、日本とアメリカの企業の違い、半導体について、起業についてなど、全てが興味深かった。*
- ・ *以前に比べてだいぶ積極的になった。また、自分で考えること、自分なりの意見をまとめ、時として主張することの大切さを身にしみて感じた。*
- ・ *英語は学ぶものと思っていたが、自分の言いたいことを表現する道具であるにすぎないことがわかった。*

6. おわりに一若者を国外に出すことの意義

NHK-TVの報道によると、東大生の70%が英語に自信がないという。英語レベルの低さも含めて、日本はエリート層の知的な競争力が国際的に見て低いことが問題だといわれている(黒川清「イノベーション25」)。今後外国との交渉がますます増える日本国のリーダーたちが、英語を自由に操れないというのは極めて深刻な問題である。日本国内市場の縮小傾向を反映して、日本企業の海外志向は一層増大している。学生にとっては、これからは英語に自信がないということは就職にもマイナスとなる直近の問題でもある。

さらに、日本は高度な文化を持ち、思いやりの深い非常に住みやすい環境となっている。そのため多くの若者が国内に籠り国外への関心が希薄になっているように思う。米国への留学生数も年々減少していることはよく知られている。外から見てみると、日本の若者はグローバル化を実感しないで、難しい問題を考えることは避け、安易に生きているようにさえ見える。これを海部美知はその著書で「パラダイス鎖国」(アスキー新書、2008年)と表現しているが、まさに日本はパラダイスであり極端に言うと鎖国しているということも出来る。しかし、東日本大震災以後の日本は、新しい発想とアイデアで新しい国づくりを行い、世界との競争に立ち向かわねばならない状況にある。若者には一層の研鑽が望まれているのである。

九州大学では、このユニークな英語研修をこれまでに5回実施して、英語研修だけでも230人を超える学生をカリフォルニアへ派遣した。その結果、若者を国外に出して考えさせることが彼らに如何に大きなポジティブな変化を与えるかを実感してきた。英語に関しても、日本で英会話を学ぶのとは全く違うものだと感じている。アメリカで学んだ学生達が何に気が付き、何に驚いたかを整理すると以下のようになる。

- ・ アメリカでは選択肢が多く、夢を持って人生設計している人が多いことに気がつき、自分が何も考えずに狭い中で生きていたことに愕然とした。
- ・ アメリカで知り合った学生はみな学習意欲が強いことに驚いた。
- ・ 外国人とやりあうには自分の意見をしっかり持ち、はっきり表現し、主張する必要があることに気がついた。
- ・ 理系文系の概念や専門にとらわれていた自分が異常であり、もっと広い分野のことを学び、広い世界を見なければならぬことに気がついた。

- ・ 国際的に生きるということは人種、年齢、性別に関係なく、何が出来るかが一番大事だと気がついた。
- ・ 英語は単にコミュニケーションの手段に過ぎず、慣れればいいのだということに気が付いた。
- ・ 日本人であることの素晴らしさを発見したが、日本のことを聞かれた時に日本のことを知らなすぎることに愕然とした。
- ・ 授業でも研究でも先生と生徒の間のコミュニケーションが多いのに驚いた。
- ・ 今までやったことがないプレゼンの練習を通して、初めて人前で話す自信がついた。

これらは日本にいたのでは気がつかないことであり、これからの日本に必要なイノベーションマインドや自立的、積極的な人材の養成にとって大事な項目を含んでいると思う。九州大学では、このように学生を国外に出すことの重要性を認識して、今後ともこの英語研修プログラムに力を入れて行きたいと考えている。この研修をきっかけにして、自分で一層のレベルアップに努めて留学を考える学生も多く出てきた。この短期の研修が長期留学へのきっかけを与えているということである。幸い文部科学省もそれらの必要性に基づいて、2011年度から3カ月未満の受入れ、派遣プログラムを支援する留学生交流支援制度（ショートステイ、ショートビジット）を開始した。本学の英語研修は同制度のショートビジットプログラム（学生派遣を支援するプログラム）に採択され、今回のSVEP, ALEPに参加した学生たちは初めてこの制度の恩恵に浴することができ、大変喜んでいる。

各プログラムの詳細は下記のホームページを参照されたい。

www.isc.kyushu-u.ac.jp/california

謝辞

このプログラムを実施するに当たり、学生に多くの貴重な実体験と新しい知見を得る機会を与えていただいたフィールドトリップで訪問した会社や研究所の皆さん、および、貴重な時間を使って学生に講演や講義をしていただいたビジネスマン、研究者や先生方に心から感謝します。英語研修のカリキュラム作成、教師の採用、教室の選択、研修の実行に尽力いただいたサンノゼ州立大学SALのMarianne Wheelerさんとスタッフの皆さん、またホームステイに際し優れたホストファミリーを探してくれたISPのJean Ikedaさんとスタッフの皆さんに感謝します。また、日本側で学生の募集、パスポートやビザの取得に関して学生を支援していただいた国際部の皆さんやカリフォルニアオフィスのスタッフの熱心な支援に感謝します。